小島烏水全集

第八卷

小島烏水全集

第八卷

大修館書店

小島烏水全集　第八卷　（第六回配本）

定價八八〇〇圓

昭和五十五年十月二十日印刷
昭和五十五年十月三十日發行

著　者　小島烏水

發行者　鈴木敏夫

印刷者　青木　勇

發行所　株式會社　大修館書店

東京都千代田區神田錦町三―二四
電話〇三（二九四）二二二一（代表）
〒一〇一　振替（東京）九―四〇五〇四

第八巻　目次

日本アルプス　第四巻

序　三
天龍川　五
山川印象記　二六
一　私の畫像　二六
二　北齋の富士山　三〇
三　八ヶ岳の黒百合　三三
四　陰暗の谷　三九
五　山の町　四一
火山風景論　四五
日本山岳景の特色　五六

甲州鋸岳　六七
上　鋸岳の釜無山脈　六七
下　鋸岳の最高峰　七三
飛騨雙六谷　七八
一　最後まで取り殘された溪谷　七八
二　美濃飛騨高原の山岳　八三
三　日本アルプスと飛騨山脈　八七
四　雙六谷の位置　九四
五　雙六谷の名稱　九七
六　雙六谷の傳說　一〇三
七　雙六谷の水の美　一〇七
八　雙六谷の段丘　一一三
九　雙六谷の入口より水源まで　一一五
十　雙六谷及附近の山民語　一二五
十一　笠ケ岳　一二九
江戸錦繪に描かれたる飛騨の山水　一四二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山上の天幕旅行　一五二
山岳崇拜論　一六二
繪畫の題材として山岳の出現　一九一
上高地風景保護論　一九九
日本アルプスに果して雪線なきか　二〇六
雪の繪姿　二一二
上　間の岳に出現する農鳥　二一二
下　富士山の豆蒔小僧　二一五
隨筆三章　二一七
一　尾根といふ語　二一七
二　甲州山村の三升桝　二一九
三　登山記念の千社札　二二二
山王臺雜記　二二八
一　購　屋　二二八
二　亡びゆく森　二二二
三　柳　二二八

四　山手寺院建築の線と表情　二四二
五　錦繪の芝居　二四八
六　講演遊記　二五四
圖版解說　二五九

山岳會初期のころ

白崩岳駒ヶ岳異同辨　二六九
「登高自卑」の投書　二七二
『雲表』自題　二七五
富士山美觀　二七六
『富士山大觀』はしがき　二八〇
緑にあらずんば行かず　二八三
山水趣味　二八四
外國人の日本山岳名稱考　二八七

日本山岳にクラの名稱多き理由　二九〇
冬の山　二九一
世界に於ける山岳會の全數　二九七
日本山岳案内記は如何に編輯すべきや　三〇三
太平洋畫會出品の水彩山岳畫評　三一六
甲州仙丈岳と奥仙丈岳　附白峰の新登路　三二五
震災豫防調査會に望む　三三二
荻野音松君を憶ふ　三三四
山岳寫眞の名家　三四〇
『最新水彩畫法』序　三四五
四方山話　三四九
「山岳」第五年紀念號發刊の辭　三五三
名譽會員ウォルタア・ウエストン氏略歴及び自傳　三五四
『日本アルプス』第一卷　廣告文　三五七
富士山名所記　三五八

飛驒國印象記　三七〇
『淺間山』序　三七七
クツク博士のマツキンレイ登山詐僞露顯　三八〇
山岳村民の生活　三八七
鯉鮒山、五龍山及び後立山　三九二
富士山の昔の圖畫及び書籍　三九七
名譽會員志賀重昂氏　四〇三
拔海一萬尺　四〇六
『飛驒山川』序　四一五
「白峰三山に就いて」の異議　四一七
富士へ　四二八
『瑞西風景論』の作者ジョン・ラボツク先生を弔ふ　四三五
高山に於ける寒暑の激變と空氣の稀薄及び山岳病　四四一
趣味と好尚　四四八
八ケ岳森林の大伐採　四五〇

山岳のクラ及びヲネの語原に就いて　四五二
＊
「山岳」編集者として　四五四
室中語　四五四
「直線美と曲線美」について　四五九
讀者曰―「はがき」の投書を載す　四五九
「口繪穂高山殘雪寫生の旅行談及び所感」について　四六〇
二萬三千四百呎に登る　四六二
寫眞の御惠贈を願ふ　四六三
餘白を借りて　四六四
日本山岳高度表　四六五
外國の新聞雜誌に見えたる山岳記事纂輯　四六六
硫黄岳の噴煙　附　諸新聞雜誌記事の誤謬を正す　四七〇
雜件一束　四七七
全世界最初の山岳會が初めて生れ出でたる家　四七八
山岳會第一大會の記　四七八

飛驒叢書の出版　四九六
「越中劔岳先登記」はしがき　四九八
會員登山の通信を望む　四九八
本號の表紙　四九九
「信州高原落葉松の色彩」について　四九九
雜報材料の寄送を乞ふ　五〇〇
本會名稱の改正　五〇〇
會員章の制定　五〇一
山岳會第二大會の記　五〇二
甲斐駒ケ岳の小舍　五〇九
飛驒高山町に開かれたる山林家大會　五一〇
來年初號の「山岳」及び山岳寫眞帖『高山深谷』の發刊　五一〇
「山岳」第五周年紀念號發刊豫告　五一一
槍ケ岳及び穗高山間の山稜橫斷記　五一三
海外山岳彙報　五一六
ウェストン氏登山談　五一九
表紙解說　五二〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

丸山晩霞氏の作畫頒布に就きて　五三〇
「山岳會第三大會の記」前記　五三三
『飛驒案内』と『淺間山』の出版　五三三
「各地の標高の事より」附記　五三三
陳列品評判記　五三四
「祖國山川森林の荒廢」について　五三八
名譽會員ウォルタア・ウェストン氏の來日及び講演會豫告　五三九
大下藤次郎氏逝く　五三〇
「ウェストン氏日本アルプス講演會」補記　五三一
本號の插繪に就いて　五三三
鋸岳白崩岳及び其他の二三ケ條　五三三
出品評判記　五三五
信濃山岳研究會　五三九
英國大使ジェームス・ブライス氏より本會への口信　五四〇
英國前山岳會頭フレッシュフィールド氏來る　五四一
伊太利山岳會の五十年祝賀　五四二
會員青木忠次郎氏の逝去　五四三

東京地質學會に於ける飛騨山脈の地質及び氷河作用に就いての講演　五四五
茨木猪之吉氏作山岳畫頒布に就いて　五五二
「『白峰三山に就いて』の異議を讀む」附記　五五四
圖版說明　五五五
フレッシュフイールド氏の「日本山岳旅行記」　五五七
大井川上流の流量　五五八

附錄二篇

日本の高山深谿　五六三
甲斐の白峰　五九〇
解題・解說　近藤信行　六二一

小島烏水全集　第八卷

日本アルプス　第四巻

序

嚮に本書第三卷を出だしてより以後、約三年間に亘りて、日本アルプス系に關する紀行、論文、隨筆など、書きつらねたるを集めて、こゝに第四卷を成せり、著者は或一山脈に就いて、首尾を貫通して、系統的に探究し得らるゝほどの、落ちつきたる旅行をしたることなし、全く感興的に動きたる、斷片的の旅行なり、文章亦おのづから然らざるを得ず。

別に著者一私人の周圍を描きたる小品文をも添ゆ、素より山岳の記述にあらねど、山岳より全く離隔せられて、著者は日常の生活を、送り得られざることは、この中よりも看取せらるべきかとて、敢て捨てざりき。

本書の裝釘意匠挿畫及其他に就ては、例に依りて友人諸君の厚誼に負ふところ、頗る多かりしを謝す。

大正四年六月

日本を去るに臨みてしるす

山王臺にて

著　者

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com